



Title	いわゆる「ナイフ形石器文化」をめぐる学説史と方法論的展望：関東平野南部の台地別層位編年に着目して
Author(s)	長沼, 正樹
Citation	論集忍路子, 3, 37-58
Issue Date	2010
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/59226
Type	article
File Information	naganuma-Oshorokko-3.pdf



[Instructions for use](#)

いわゆる「ナイフ形石器文化」をめぐる学説史と方法論的展望 ——関東平野南部の台地別層位編年に着目して——

長沼正樹

【要旨】いわゆる「ナイフ形石器文化」の編年研究をめぐる学説史について、関東平野南部の台地別層位編年に着目して検討した。関東平野南部の旧石器編年研究は、層位を基準として台地別に体系が異なる点に特色があり、いわゆる「ナイフ形石器文化」にとりわけ顕著である。この特色は、開発にともなう埋蔵文化財の緊急調査が考古学的発掘調査の主体という特殊な社会的・経済的背景に由来し、1970-80年代に生じた膨大な発掘資料を秩序づける必要と、編年の地域主義によって言説空間が規定された結果と考えた。しかしながら、編年研究と不可分な形で報告書に提示された「文化層」を研究上の単位とすること、ならびに現代社会の「地域」別に編年体系が異なることは、いずれもそのままの形では行動論研究とは整合しがたい。今後、関東平野の旧石器資料について行動論研究を進めるには、遺跡形成論による行為痕跡の単位性の検討と、現代社会の「地域」にとらわれない空間範囲の措置が必要になる。

キーワード：台地別層位編年 編年の地域主義 行動論 行為痕跡 空間範囲の措置

はじめに

長い間にわたって前提視されてきた、いわゆる「ナイフ形石器文化」や「段階編年」への批判が盛んである（沢田, 2001; 安斎, 2003・2007・2008; 田村, 2006; 竹岡, 2003・2005; 伊藤, 2007・2008; 中村, 2007; 仲田, 2007; 須藤, 2007など）。行動論的研究を重視する研究者が含まれる特徴も見えてとれる。行動論は、単に解釈や説明それ自体の興味深さだけではなく、自然環境と人類活動の相互作用システムという、より普遍的な問題設定に通じる点で意義が大きい。

これとは別に、旧石器資料を素材として人類進化を研究する観点から、行動的現代人の拡散と各地における適応の諸相の解明が、汎世界的に求められている。呼応して東アジアでも、現在の国家を超えて共通した課題意識の形成が目指されている（小野, 2009）。こうした動向に、いわゆる

「ナイフ形石器文化」の土着的で豊かな研究蓄積を接続したいと仮に望むとしたら、その際にも行動論は重要な議論の一つとなる。

一方で東京都下原・富士見町遺跡（新井・石川ほか, 2005; 新井・野口ほか, 2006; 野口・山田ほか, 2007; 遠竹・野口, 2009）の旧石器資料（林, 2007; 野口・林, 2008など）では、武蔵野台地の考古層序区分で IIc 下層（黒色土）から IVc 層（ハードローム）まで約 1.5 m の深さに包蔵される、それぞれ垂直分布のピークが異なる石器集中の間で多くの接合関係を確認した（長沼・野口ほか, 2008）。この取り組みをきっかけに、これまで層位を軸に構築されてきた編年研究の方法と、それが実践された経緯について点検する必要を、あらためて強く認識した¹⁾。

小稿ではこうした課題意識から、関東平野南部のいわゆる「ナイフ形石器文化」をめぐる学説史

* 明治大学校地内遺跡調査団 〒183-0005 府中市若松町 5-6-1 明治大学校地内遺跡調査団事務所

E-mail: mngnm@solid.ocn.ne.jp

と方法論について、一部の論点を検討する。

I. 対象の限定と検討の視点

関東平野南部のいわゆる「ナイフ形石器文化」の編年研究には、多くの詳細な学説史がある（安斎、2007・2008；伊藤、1999；亀田、1999；小菅、1999；諏訪間、1999；鈴木、1999；西井、2000・2008ほか多数）。小稿でもこれらを参照した。論点は多岐にわたり、網羅主義では議論が拡散するので論点を限定する。

関東平野南部における旧石器編年研究の特色として、①層位を基準とする、②台地など「地域」別に編年の体系が異なる、この2点を指摘できる。小稿では、この2点がどのように形成され、そのためにどのような性質をもち、行動論の観点からどう問題となるのか点検することに目的を限定したい。なお尖頭器石器群や細石刃石器群、「いわゆる縄文草創期」の石器群とも、本来は一連の編年研究ではある。しかし尖頭器石器群以後については、層位よりも「他地域」を含めた人工遺物の特徴が重視されてきた²⁾。小稿で問題としたい上記2点の特性は、いわゆる「ナイフ形石器文化」に相当する石器群に、もっとも顕著に認められる。この理由から小稿で中心的に扱うことにする。

学説史の検討では、考古学の研究と現代の社会的・経済的背景との関わりに着目したい（小野、1977など）。この視点は、学説史が他にもあり得た別の方向ではなく、特定の方向に展開せざるを得なかった理由を考える上で有効である。世界各地で多様な考古学研究が進められており、それらの文化的多様性や固有の歴史的背景は、いうまでもなく尊重されるべきである。だが土着的な特殊性が強すぎるあまり、方向性が異なる議論との接続に支障をきたすならば、自覚的な方向修正も必要となることもあろう。

すでにパラダイム史観を用いて学説史を相対化し、明確な方向性を打ち出した整理があり（佐藤、1992）、小稿でも基本的な認識を多く拠っている。加えるならば、特定パラダイムへ帰依しているか否かだけで個別の議論や研究者を評価すると、パラダイムを超えた議論の蓄積を阻害し（共約不可能性）、長期的な研究全体の進展にとってデメリットとなる。多様な視点や背景による個別研究の蓄積こそ、長い目で見たときに研究の全体を豊か

にするであろう（ポパー、1995など）。小稿では、異なる学的背景や解釈枠組みによる議論であっても、類似の問題に照射していると判断したものは、あわせて取り上げることにする。

II. 関東平野南部の層位編年とその問題点

(1) 層位編年の論理構成

関東平野南部の編年研究上の利点は、風成層の厚い堆積である。これは首都近郊の高い開発頻度という条件下で成立した。都心における、ホワイトカラー人口の郊外転出（荒川、2009）をうけた土地開発の増加という特殊な時代背景が、旧石器編年では層位を重視するべきとの方針（芹沢、1967など）に好適なフィールドでの調査の実践と結びつき、独特の旧石器編年研究を生んだと言えよう。まず武蔵野編年（小田・キーリー、1973；Oda・Kealy、1975など）、および初期の相模野編年（小野・鈴木ほか、1972；矢島・鈴木、1976）について、それらの論理構成を確認する。

①個別の発掘調査区では、石器群の垂直分布で出土層準を判断し、その出土層準の違いによって、時間差を見込んだコンポーネント（component）を把握した。1949年の群馬県岩宿遺跡（杉原、1956）でも意識されていた方法だが、神奈川県月見野遺跡群（明治大学・月見野遺跡調査団、1969）、東京都野川遺跡（小林・小田ほか、1971）の調査で、このアイデアの有効性が強く印象づけられた。

②分離したコンポーネントごとに石器群の特徴（示準石器、器種や石材の組成、剥片剥離などの製作技術）と、出土層準の層相をセットとして把握し³⁾、このセットを他の複数の遺跡に探った。武蔵野台地と相模野台地ではローム層の堆積状態が異なるが、それぞれの台地内では層相が共通するはずとの見通しにより、異なる遺跡や発掘調査区の間でも、台地内では同じ層名の付与に努めた（小野・鈴木ほか、1972；小田・キーリー、1973）。

③層位編年は台地別に編成された。これを台地別層位編年と呼んでおく。先述の「石器群と層相のセット関係は台地内のみ有効」との見

武蔵野：小田・キーリー 1973

Phase	Sub	自然層名
Phase IV	-	III 層
Phase III	-	III 層
Phase II	II b 期 II a 期	IV 層中と III 層の一部
Phase I	-	X 層から V 層

(提示コンポーネント数：26)

相模野：小野・鈴木ほか 1972

期	自然層名
第 V 期	(暗色帯による規定はなし)
第 IV 期	暗色帯 2 の形成が終わった頃から暗色帯 1 の形成が終わった頃
第 III 期	暗色帯 2 の上部からその上面
第 II 期	暗色帯 4 より新しく S1S まで
第 I 期	暗色帯 4 とそれ以前

(提示コンポーネント数：12)

相模野：諏訪 1988・2001

段階	自然層位名	
	1988 年	2001 年
段階 XII	漸移層～富士黒土層下部	漸移層～富士黒土層下部
段階 XI	L1S 上面	L1S 中部～漸移層
段階 X	B0 中部～L1S 上部	B0 中部～L1S 上部
段階 IX	L1H 上部～B0 下部	L1H 上部～B0 下部
段階 VIII	L1H 下部から上部	L1H 中部
段階 VII	B1 上部から B1 上面	B1 上部～上面
段階 VI	L2 から B1 中部	L2 ～ B1 中部
段階 V	B2L 下部から B2U 上面	B2L 下部～B2U
段階 IV	B3 上部から B2L 下部	B3 上部～B2L 下部
段階 III	B4 上部ないし B3 下部から B3 中部	B4 上部と B3 下部
段階 II	B5 下底～B4 上部ないし B3 下部	L5 上部～B4 上面
段階 I	L6 下底～L6 上面	B5

(提示コンポーネント数：86) (追加コンポーネント数：27)

武蔵野：小田 1980a・b

分化期	亜文化期	自然層名
第 IV 文化期	-	第 III 層最上部
第 III 文化期	-	第 III 層中部
第 II 文化期	II b II a	第 IV 層上部から第 III 層最下部 第 V 層上部から第 IV 層中部
第 I 文化期	I c I b I a	第 VII 層上部から第 V 層下部 第 X 層最上部から第 VII 層下部 第 X 層の中部から上部

相模野：矢島・鈴木 1976

期	自然層名
第 V 期	L1H より L1S 下半部
第 IV 期	L2 および B1 の全層準
第 III 期	B2L 上部より B2U
第 II 期	L4 から B2L の上半部
第 I 期	B4 以下

(提示コンポーネント数：26)

南関東：鈴木・矢島 1978

期	細分	自然層位名	
		相模野	武蔵野
第 V 期	-	L1S～L1H	III 層
第 IV 期	-	B1～L2	IV 層中・上部
第 III 期	-	B2U～B2L 上部	IV 層下部
第 II 期	後半期 前半期	B2L 下底～B3 中位	V～VII 層 IX・X 層
第 I 期	-	-	X 層

(提示コンポーネント数：31)

南関東：鈴木・矢島 1988

期	細分	自然層位名	
		相模野	武蔵野
第 V 期	-	L1S～L1H	III 層
第 IV 期	後半 前半	B1 上部～上面 B1 中～L2	IV 層中・上部
第 III 期	-	B2U～B2L 上部	IV 層下部
第 II 期	後半 前半	B2L 下底～B3 中位	V～VII 層 IX・X 層
第 I 期	-	-	X 層

図 1 武蔵野台地・相模野台地の各編年案と自然層位名（考古層序区分）の対応関係

通しに加え、1970 年代の初頭には、武蔵野台地をフィールドとする調査・研究グループと、相模野台地をフィールドとするグループが、切磋琢磨していたとの事情もある（織笠, 2005; 矢島, 2005; 鈴木, 2007; 小田, 2009

など）。AT を鍵層として、武蔵野台地の VI 層 = 相模野台地の L3 層と整理されるまで（町田・新井, 1976; 矢島・鈴木, 1976, 小田, 1979）、武蔵野台地と相模野台地は、研究上は大きく異なるコンテクストにあった。

④複数の発掘調査区で繰り返し確認できる、石器群と層相のセット関係を、「時期」「phase」「段階」などのカテゴリーに整理し、これを編年とした。個別のコンポーネントの新旧を、出土層準で判断する手法＝相対的な時間区分⁴⁾は、武蔵野台地も相模野台地も同じである。図1に示したように、考古層序区分の自然層名と、「時期」「phase」「段階」が対応する形で共通している。その一方、時間区分として分離した各コンポーネントを「時期」「phase」「段階」などに統合ないし分節する基準＝時期区分は、特定器種（示準石器）の消長や「石器群構造」など石器の評価に基づいた、異なる層位区分を用いていたこともあわせて、実体としてはほぼ同じ内容の石器群とその変遷であったにも関わらず、武蔵野台地と相模野台地では異なる編年体系となった。

(2) 指摘された問題点

1960年代までは重層遺跡の調査例は少なく、出土層準の違いを時間差・時期差とみなす①は前面には出ていない。茂呂→市場坂という当時の型式論的な変遷観（戸沢，1968；佐藤，1970など）が、月見野遺跡群と野川遺跡の層位的出土例で逆転し、編年における層位論の優位性を印象づけた。それまで型式論による編年の重要資料であった埼玉県市場坂遺跡（滝沢，1962・1965）は、月見野遺跡群・野川遺跡の調査を経た後年には、他遺跡での層位的出土事例の蓄積をもとに、「本来2つの生活面に分離されるべき資料が一群のものとして理解されている」（矢島・鈴木，1976：26注7）、「市場坂期のメルクマールとなるような固有の石器群は、市場遺跡（ママ）には存在しない」（荒井，1979：54）との評価に至る。

1970年代の前半、月見野遺跡群と野川遺跡の概報やそれからの数年間は、層位を基準として出土石器群を時間別のコンポーネントに分解する意図は共通するものの、それらのコンポーネントを示す用語は、調査者や報告書ごとに多様である。「第III層石器文化」など自然層名＋「石器文化」、または「上層石器文化」や「下層石器文化」、「生活面」、後に1980年代以後一般化することになる「文化層」などがみられる。

一般に点数が多い石器集中は、垂直分布幅が広い⁵⁾。武蔵野台地の仙川遺跡では、約2700点の垂直分布が約65cmの厚みをもつ「第III層文化のユニット」について、「二枚の文化層の重複ではないかと疑がった」、「野川遺跡のハードローム部では約30cm単位で文化層が重複していた—中略—その他の遺跡でも20～30cm前後である。仙川遺跡は一文化層の遺物の出土巾は異常とも云える」との記述がある（東京都教育委員会，1974：25）。1970年代前半の武蔵野台地・野川流域遺跡群では、コンポーネントを構成する石器の点数が数点～数百点と少ない例が多く、提示された垂直分布図を見ると垂直分布の幅も相応にせまい。武蔵野台地における研究史の初期には、コンポーネントの垂直分離が困難な事例は、多くはなかったであろう⁶⁾。

その一方で、相模野台地の月見野遺跡群の調査と整理を通じて、出土層準だけではコンポーネントの垂直分離が困難な場合に、個別別資料分類を用いる方法が提示された（矢島・鈴木，1976：6など）。埼玉県砂川遺跡の調査と整理で発案された時点での個別別資料分類は、当初は遺跡で遂行された人類活動の復元を直接目指す試みの一つであった（戸沢，1968）。後にコンポーネントの評価（生活面の識別や、いわゆる「ユニット」の抽出）にも援用されてゆくことで（矢島，2005）、個別別資料や接合資料の共有が、石器集中間の同時間性を保障するとの観点も後付けされていったようである⁷⁾。

しかし冒頭で触れたように、出土層準が異なる石器や、石器集中の間でも接合関係が確認された（多聞寺前遺跡調査会，1983；河本・河尻ほか，2005；長沼・野口ほか，2008など）。この現象には二通りの説明が与えられる。ひとつは埋没過程の自然営力で石器群が移動・再配置されたと解釈し、出土層準のわずかな違いは、石器群を形成した人類活動の時間差を意味するとは限らないと見る方向である（御堂島，1991；Hofman，1992；Waters，1992：292など）。他方は後世の人類による再利用などを想定し、接合関係は、かならずしも行為の同時間性を意味しないと見る方向である（田村，2006：54-55注4など）。おそらく遺跡には両者が、そして素朴な予測どおり出土層準の違いが石器群形成の時間差を示し、接合関係が行為

の同時性を示す場合も含めた4者が、混在していることも考えられる。どのような量比ないし確率で混在しているのか把握できないまま、接合＝同時、異なる出土層位＝時間差と決めつけて高次の解釈に進むと、信頼性の低い推論に終始してしまうであろう。

②の層相とのセットは、地質学・古生物学の生層序学の手法である。しかし旧石器編年で問題となる石器群の変化が生じた時間幅は、化石生物種の出現・消滅を扱うスケールの時間幅よりも小さい。出土層位に強く依存して時間区分・時期区分を進めることへの疑義が繰り返し提示された(阿部, 1983; 橋本, 1991; 藤野, 1992; 栗島, 1999など)。また層序区分(分層)についても、暗色帯を目安とする不確実性、分層の再現可能性が不明、同一名称の層が複数の調査区(遺跡)の間で確実に対応するか不明、既存の石器変遷観に引きずられた分層などの問題点が、やはり繰り返し指摘された(町田・鈴木ほか, 1971; 道澤, 1992; 栗原, 1999・2003; 諏訪間, 2003a; 御堂島, 2003など)。

土層断面を一本線で分層する慣行は、竪穴住居や墳丘といった人為堆積物の調査で定着したという(新井, 2007)。しかし、不整合面を含まない風成の単一堆積相(立川ローム)には、原理的には適用しがたい(堆積学的な根拠をもたない)。それにも関わらず、人為堆積物を調査するのと同じ手法が、考古学の調査と整理の必要上から要請されてきた。上記の繰り返しの指摘は、こうした二律背反ともいえる問題の原理的性質に触れているとも考えられる。

③で編年体系が台地別とされた理由のうち、台地内では層相と石器のセット関係が共通するとの名目に、そぐわない事例が蓄積されつつある。例えば武蔵野台地では、南部の野川流域でIV層上部から出土する石器群と同じ特徴の石器群が、東部ではIII層から出土することが判明した(荒井, 1979など)。野川流域でIV層下部～第1黒色帯(V層)上部から出土する石器群と同じ特徴の石器群さえ、III層から出土する例もある(吉田, 1995)。逆に同じ出土層準(IV層上部)から出土する石器群でも、遺跡によって特徴や内容が異なる(織笠, 1980: 33-34など)。武蔵野台地におけるIV層では、個別遺跡の状態による時間の分解

能の問題とも言えるかもしれない。しかし堆積がより厚い相模野台地でも、B1上部付近の石器群は変異が大きく、その変異が層位に表れない細かい時期差なのか、活動内容などの違いなのか決着していない(諏訪間, 1988・2001; 鈴木・矢島, 1988; 白石, 2003; 鈴木, 2003など)。これらは台地別に編年を進める方針の妥当性を、層相の共通性をもって擁護する論法への疑いを招くかにも見える。にもかかわらず「台地別」との前提は棄却されることなく続いた。

④の時期区分と体系化について、武蔵野編年は当初、Backed bladeの出現前(野川I期)→Backed bladeの出現(野川II期)→Backed bladeの消滅後(野川III期)(小林・小田ほか, 1971: 237, 239)との形であった。のちにIII層の中を層位によらずにPhases III(細石刃石器群)とPhase IV(いわゆる「縄文草創期」に関連する尖頭器石器群)に区分⁸⁾する(小田・キーリー, 1973)。こうした武蔵野編年は、示準石器編年に他ならないとの指摘がある(矢島・鈴木, 1976; 伊藤, 1991; 鈴木, 1999; 五十嵐, 2002など)。一方の相模野編年では、石器の器種組成・製作技術にくわえて、礫群の増減、遺跡分布のあり方、自然環境の変化など多くの項目を立てている点に特徴がある(矢島・鈴木, 1976)。第V期にナイフ形石器群・尖頭器石器群・細石刃石器群をすべて含めたことにも、細石刃石器群を層位によらずに独立させた武蔵野編年との違いが際立つ。こうした相模野編年は、組成論的であるとの指摘がある(伊藤, 2003: 188)。

このように多くの疑問点が繰り返し指摘されたにも関わらず、初期に設定・始動した方向から、方法や前提を変更していない。一体なぜであろうか。この疑問については、後ほど踏み込んで考えたい。

(3) 編年研究と報告書書式

1970年代の末から、開発に伴う重層遺跡の大規模調査が連続したのは相模野台地である。1979年報告の上和田城山遺跡(大和市教育委員会, 1979)や相模原市下九沢山谷遺跡(中村, 1979)、1980年報告の綾瀬市寺尾遺跡(神奈川県教育委員会, 1980)では、第I文化層・第II文化層といった序数詞で、単一の発掘調査区内で完結する「文化層」が、コンポーネントを命名する呼称と

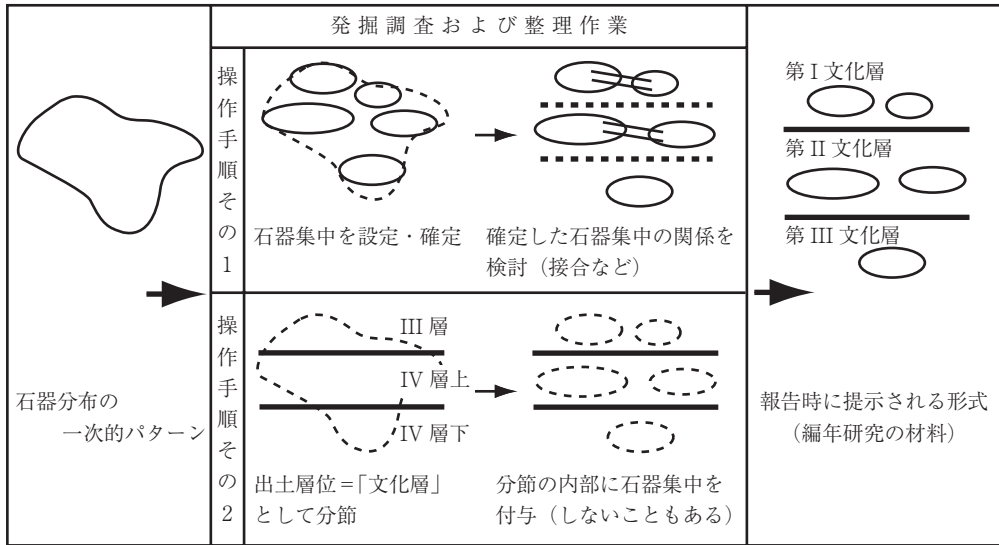


図2 編年研究に適した旧石器報告書の作成手順

された⁹⁾。この方式ならば、A 遺跡の第 I 文化層・第 II 文化層と、B 遺跡の第 I 文化層・第 II 文化層が、異なる考古層序区分や石器群を示してもよい。つまり層相+石器のセット関係を把握、との原則は守りつつ、呼称と実際とのミスマッチを回避できる。多くの埋蔵文化財発掘調査報告書(以後、単に報告書とする)に採用されていた。

これらを受けて 1980 年代の中頃になると、相模野台地でいわゆる「ナイフ形石器文化」の終末といわれる「尖頭器文化」の開始をめぐる議論が活性化(白石, 1983; 諏訪間・堤, 1985; 鈴木, 1986; 織笠, 1987a; 樫田, 1987; 諏訪間, 1989 など)。1988 年には諏訪間編年(諏訪間, 1988)と改訂相模野編年(鈴木・矢島, 1988)が公表された。改訂相模野編年は以前に提示した「期」の中を「前半・後半」と細別してゆく一方で(図 1 の右中から右下)、諏訪間編年は上位や下位の階層をもたない 12 の「段階」の並置となっている(図 1 の左下)。ただしこうした違いを超えて、ナイフ形石器や尖頭器の形態、器種や石材の組成、二次加工(調整加工)技術と剥片剥離技術からなる「石器群構造」を、報告書の「文化層」に準拠して整理する手法では共通していた。武蔵野台地でも、高井戸東遺跡(高井戸東遺跡調査会, 1976; 高井戸東(駐車場西)遺跡調査会, 1977)や鈴木遺跡(小平市鈴木遺跡調査会,

1976・1978; 鈴木遺跡刊行会, 1979・1980・1981)などの調査成果をうけて、第 2 黒色帯(AT 下位)のナイフ形石器(服部, 1981)、第 1 黒色帯のナイフ形石器(伊藤, 1990)などの編年細分が試みられた。出土層位で設定したとされる報告書の「文化層」に準拠して、ナイフ形石器などの形態分類、組成や、剥片剥離技術などを整理する手法は、先述の相模野台地の諸研究と同じである(栗島, 1983)。

1980 年代を通じて類似した手法の編年研究が増える中で、報告書の「文化層」を編年研究上の単位とする慣習も定着したようである。並行して報告書の書式も、編年研究を進める上で使いやすいものが確立していった。出土層準によるコンポーネントの分離を「文化層」として提示する、石器の実測図と分布図を多数提示し観察表が付属する、短い「考察」では編年的位置づけに言及する(「考察」がないこともある)、などの特徴を指摘できる。

図 2 には、この「編年研究に適した」報告書の作成手順を模式的に整理した。図 2 の左は発掘前の石器分布の一次的なあり方を表し、右は報告書で提示される姿を表す。左から右へと情報を加工・編集する行為が、発掘調査と整理作業である。中央に 2 通りの操作手順を整理した。最終的には「文化層」別とする点では共通しているが、上段

の操作手順1では、層位以外にも留意して「文化層」を考える。下段の操作手順2では、最初に出土層位で「文化層」を設定・固定し、それを前提として、石器集中や接合関係などの検討に進む。図2は単純化したものであり、石器の出土状態の実情にあわせて、担当者が適切と判断する様々な配分で、操作手順1と2を併用・調整するのが実際である。操作手順2では、平面的に重複した石器集中の間に無遺物層がない場合に、分離の再現性に問題が残る（たとえば諏訪間, 2003b）。また諸般の事情から接合作業の実施を、あらかじめ分離した「文化層」の中だけにとどめた場合もある。

冒頭で述べた下原・富士見町遺跡の、「出土層位の異なる石器集中の間に頻繁な接合」は、上段の操作手順1により、全層位の出土石器を接合対象としたことで確認できたものである。こうした事例は他遺跡では多くないが、これまでは整理作業の進め方の都合から、つまり操作手順2により、異なる「文化層」と判断した単位を超えた接合を実施していないことが原因で、報告例が少ないとも考えられる。今後の調査では、すべての出土層位の全石器を接合対象とする整理作業を進め、下原・富士見町遺跡と同様の事例が増えることを希望する。そうした事例の蓄積によって、現象の多角的な検討が可能になるであろう。

具体的な検討項目としては、垂直方向への石器の移動量の評価や、埋没後擾乱が強い・弱いと解釈できるそれぞれのパターンの識別が挙げられる。さらに平面における集中部間の接合関係でも、集中部間の密接な関係を積極的に支持する接合内容と、共時性の評価に疑問が残る接合内容（風化度合いの異なるパーツの接合や、工程の区切りで平面的に離れるものなど）との識別が挙げられる。一方では「層相と石器のセット関係が共通する」という経験則を成立させ、補強する（ように見える）事例も数多く存在している。こうした事実は、なぜ両者の事例が存在するのかという問いを立てて、それを各資料体で解析的に分析していくことが重要であることを示しているのではないか。

(4) 土着的な特殊性

1990年代以後の調査事例の蓄積を受けても、1988年までに提示された枠組みから極端に逸脱する事例はないという（諏訪間, 2001など）¹⁰。

疑問点が繰り返し指摘されながら、別の方法や編年に置き換わることはなかった理由として、発掘調査による検証に長期間耐え続けている点を、第1には指摘したい。石器群の現象論レベルの変遷について基本的な共通認識が形成されたことが、1970-80年代の大きな成果であったとも評価できる。

しかしこの編年研究は、自然環境と人類活動の相互作用システムの探求という普遍的な課題とは、そのままの形では結びつきにくい。日本列島の旧石器研究では、緊急調査による成果を受け進展してきた編年研究と、行動論・遺跡形成論では成立の背景が大きく異なるからである。過去の人類活動を解釈し、年代学を介在して古環境イベントと対比するには行動論が不可欠であり、行動論の解釈の妥当性を高める手段として遺跡の自然的・文化的形成過程の吟味が必須となる。ところが日本列島では、行動論・遺跡形成論ともに海外の先史学から導入された経緯をもつ（井川, 1976; 西藤, 1983; 阿子島, 1983・1989; 安斎, 1990; 御堂島, 1991・2002; 佐藤, 1992; 田村, 1992; 中沢, 2000など）。いずれも日本社会や日本考古学の内部から自然発生した研究領域ではない。これに対して1970-80年代からの編年研究は、発掘する遺跡の選定や調査区の位置設定、発掘面積や深度など、学術的研究テーマとは異なる都合にも強く規定された中で、個別の問題点は自覚しながらも手探りの実践を重ねた成果である。結果として、1970-80年代の日本国（とくに首都近郊）の事情に土着的な偏向や特殊性が強化されたことになろう。

(5) 編年の地域主義

1965年に刊行された「日本の考古学 I 先石器時代」（杉原編, 1965）は、日本列島の各地に多様な石器群が存在することを印象づけた。これを受け、全国一律的な編年ではなく、「地域」別の編年を重視する新しい研究方針への転回が生じた。「それぞれの地域での石器群構造による編年の作業を行う中で、隣接地域との相互の検討を行うことができる。ここではじめて全国編年が具体的な課題となるだろう」（鈴木・矢島, 1978: 167）との方針である。「地域」毎に異なる「文化」があったとする理論（戸沢, 1990）が、その背後にあるとの指摘もある（佐藤, 1992; 仲田, 2007）。

これを編年の地域主義と呼んでおく。

首都近郊は大規模開発・緊急調査がいち早く増大し、編年の地域主義を先導する形となった。台地内で「石器と層相のセット関係が共通する」との見通しを、支持しない事例があったにもかかわらず、台地別に議論を進める方針が維持された第2の理由として、まず「台地別」の編年、その後「他地域」との対比という研究戦略を、編年の地域主義が力強くバックアップしたことが考えられる。この研究戦略が言説空間の主導的な秩序として可視化したのは、おそらく1979年に神奈川考古同人会が開催したシンポジウム「ナイフ形石器文化終末期の問題」であろう。話題提供の中心に関東平野南部の「台地」別の発表者を配置し、その他「各地域」のコメント・発表担当者を加える。このスタイルは後に、シンポジウム「南関東を中心としたナイフ形石器文化の諸問題」（1982年）、シンポジウム「房総の先土器時代」（1986年）、石器文化研究会の研究討論会「AT降灰以前の石器文化」（1988年）と、時期別のシンポジウム（1991年、1996年、2000年、2005年）で反復された。一台地を「一氏族」の範囲（小野、1976）や「小集団の日常的な生活範囲」（織笠、1991）、「地域単位集団」（矢島、2005）等とみなす仮定も、編年の地域主義と調和的なものである。

千葉県では「下総編年」として地域編年がまとめられた（田村・橋本、1984）。関東平野の北部では、1994年の群馬県（前原、1994）、1995年の茨城県（橋本、1995・2002）など県単位、静岡県では「愛鷹・箱根山麓」という地名単位（静岡県考古学会シンポジウム実行委員会編、1996）の整理である。発掘調査数の多寡が異なっても、編年の地域主義という方針は貫徹され続けたことがわかる。1987年からの東北日本の旧石器文化を語る会、1988年からの長野県旧石器文化研究交流会、1994年からの石器文化研究交流会といった、県単位やそれに類した研究集会も、編年の地域主義の中から生まれると同時に、編年の地域主義という価値を再生産・固定化する効果も果たしたと考えられる。

ところで1969年には、「先土器時代の「地域」を問題にすると、現在の日本の「地域」にたよってはならず当時の社会の内在的分析から地域を定めなければならない」との提起があった（小野、

1969: 22）。しかしその後、「研究者の多くが、行政体の埋文事業に従事し、個別地域の細かな情報には精通している一方、広域の莫大な情報を網羅的に入手することが困難」（亀田、1999: 117）との状況に置かれ「現在の日本の地域」に終始した。そして「先史地理学的に有意な単位というよりも、行政的動機に基づく旧石器研究の地域分化現象がおこり、先史考古学的現象の連関性を保証する空間の措定に努力することよりも、行政区画ごとの資料の把握と消化に努力が集中」（佐藤、1992: 18-19）する現実となった。「大規模開発によって増大した緊急調査の個々の資料を体系化する努力は、その資料の圧倒的な量の前にはやや空転」（鈴木・矢島 1978: 146）、「発掘の大規模化にともなう莫大な資料が発見されるようになり、その大量の資料をややもてあまし気味」（戸沢、1980: 6）との事態へ、研究者集団が苦心しながら集合的に対処を模索した姿とも考えられる。編年の地域主義は、膨大な資料を整理するには有効であった。しかしながら、行動論や遺跡形成論の目的に即して吟味・選択した発掘対象遺跡や調査方法をもとに、旧石器編年の構築を目指したわけではないことも確かであろう。自然環境と人類活動との相互作用系の研究を、関東平野の資料を扱って実施するには、行動論や遺跡形成論に不都合な部分を確認し、改めて整備する必要があると考える。

以下では先に絞った2つの論点、①出土層位を編年の基準とする、②台地など「地域」別に異なる体系にかえて、対応する①行為痕跡の単位性、②空間範囲の措定について、行動論研究に適する議論の方向性を模索してみたい。

III. 行動論研究への展望

(1) 行為痕跡の単位性

編年研究と不可分の「文化層」に分離した報告書では、既存の編年と矛盾しない資料体について、「文化層」以上に踏み込んだ分解を追及する動機は弱まる。そもそも旧石器研究では、編年研究の細別単位と、遺跡や石器が実際に生成した人類活動・行為痕跡がいかなる関係にあるのかは、明らかでない。「文化層」よりも短期の時間幅における回帰的行動の単位を「文化層」から分離することは容易ではないとの指摘（佐藤、2009: 80）は、この事情に言及しているとも思われる。

報告書が提示した「文化層」を検証し、「文化層」の区分過程が明示される事例はほとんどないとの指摘がなされた(五十嵐, 2000b)。また報告書の作成で「文化層」を分離する基準は、建前どおりの出土層位や垂直分布だけではなく、既存の編年観との循環論が生じているとの指摘もある(藤田, 2008)。こうした指摘に感情的な反感を覚えるむきもあろう。しかし、既存の編年と矛盾しない形に提示さえすれば、分離方法自体が恣意的であることは問題とされず、見逃され続けてきたのではとの危惧を喚起する点では、重要な指摘であると考えられる。これらの指摘が仮に妥当ならば、報告書の「文化層」を前提として、先述した細別編年や後述する複数遺跡間の連鎖が論じられても、導かれた結論の妥当性には疑問が残ることになる。

おそらく研究の主要論点が編年に限定されている分には、コンポーネント分離の際にいくつかの個別別資料などが「文化層」の構成に加わったり抜けたりしても深刻な問題とはならない。しかし行動論では、行為痕跡の単位の取り方が変わることには議論を大きく左右する。端的な例は、37,000点以上の石器群を出土した東京都小平市の鈴木遺跡(戸田, 1999 など)の解釈である。「部族長集団」が主導した黒耀石の入手と分配・権力維持という解釈(稲田, 1984)は、大規模な遺跡と見るか、それとも小規模な行為痕跡の集積と見るか(栗島, 1986)の違いに影響を受ける(小野, 1995: 313)。同じ問題は遺跡(発掘調査区)の単位だけではなく、「文化層」や石器集中などにも生じ得よう。ひとつの「文化層」や石器集中が一回の居住エピソードで形成されたのか、それとも複数回の行為痕跡が少しずつ集積した結果なのかは、課題の性質によってさほど問題とならない場合と、敏感に問題化する場合がある。

こうした問題と関連して、報告書の「文化層」の全体ではなく、個別の石器集中を分析単位とする提案がある(山岡, 2004・2008・2009)。また石器集中=住居、それらの集合=集落とみなすのではなく、多様な行為痕跡が集積・変形した結果として旧石器遺跡を捉えるべき¹¹⁾との提起もある(野口, 2003・2005・2007)。石器製作をめぐる行為復元や遺跡形成論の観点から、微細遺物の分布を検討する試みも、様々な目的と方法で継続されている(佐藤, 1983; 佐藤・工藤, 1989; 岡澤,

1995・2000; 野口・林, 2006 など)。

微視的な行為復元で扱う時間幅は、編年研究と一体化した「文化層」とは異なる。上述の取り組みはいずれも、「文化層」とは異なった切り口で行為復元に迫ろうとする試みといえよう¹²⁾。そもそもコンポーネントの分離は、基準の取り方に依拠して異なる複数の案を提示できる(坂下, 2005 など)。おそらく、そのいずれかが正解でそれ以外は間違いということではなく、研究目的から演繹してそれぞれ適切なコンポーネント分離を選択することになる。くわえて、すべての遺跡で同質の解析が常に可能とは限らない点にも注意する必要がある。この視点によると、個別遺跡の報告書作成に唯一の正解としてのコンポーネント分離を課すことには、おそらく意味がない。今後の報告書においては、利用目的に応じた多様な分離を利用者が自在に実施できる形で、情報を提示する工夫も重要となろう。

(2) 空間範囲の措定

編年の地域主義では、台地や行政区分=「地域」が別ならば、内容が共通する石器群でも異なる時期名で呼ばれた。シノニム(同物異名)の一種といえよう¹³⁾。ヨーロッパ等では、現在の国境を超えて分布しても、内容が共通する石器群は、Mousterian や Aurignacian など遺跡名を冠した共通の名称で呼ばれてきたが、これとはいわば正反対の慣行である。

具体例を挙げると、鋸歯状の粗い二次加工、角錐状石器や切出形石器、国府型ナイフ形石器、横長・幅広剥片といった特徴をもつ石器群は、個別の台地や「地域」を横断する広い空間範囲に分布する(織笠, 1987b・1987c・1987d; 森先, 2007 など)。しかし武蔵野編年のIIa期、相模野編年の第III期、下総編年のIIb期、諏訪編年の段階V、愛鷹・箱根編年の第3期などと、「地域」ごとに別々の時期名で呼ばれる。行動論的な議論では、まとめて一語で名指すほうが良い。これまでも、武蔵野台地の自然層名による「V~IV下層段階」や、それに類した表現がある¹⁴⁾。しかし「IV層下部段階」などと呼ぶ石器群が、武蔵野台地でも実際にはIII層から出土するなど、現象とのミスマッチも著しい。筆者は遺跡名を冠した「岩宿II石器文化」(織笠, 1987b)、「岩宿II期」(白石, 1993)、「柏ヶ谷長ヲサ系文化」(竹岡,

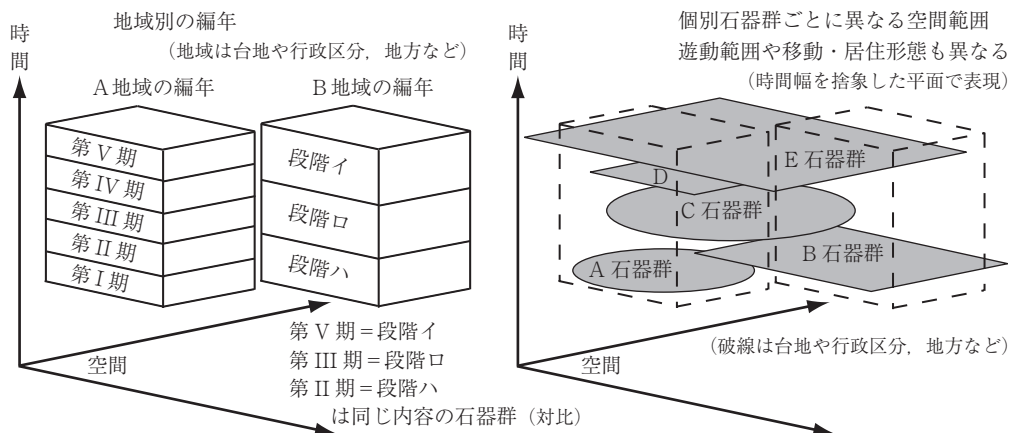


図3 空間範囲を指定するイメージ (左は編年の地域主義)

2003) などの用法が, 方向性としては参考になると考える。

1990年代の後半に, 台地別層位編年を踏襲した形で, 遺跡間の連鎖をさぐる研究が現れる(野口, 1995; 島田, 1998; 吉川, 1998; 国武, 1999など)。砂川遺跡で示唆された「石器の搬入と搬出」「遺跡間のつながり」(安蒜・戸沢, 1975; 安蒜, 1977など)を, 複数の遺跡で分析する取り組みである。そこでは遺跡間の同時性の評価にあたり, 「層位編年上の同時期=行為痕跡の同時性」と読み変えた。これにより小規模な遺跡も活動痕跡の変異の一部に位置付ける形で, 遺跡類型の把握が進んだ。しかし同時性を担保できる空間範囲が台地内に限定され, 層相が異なる地域に議論を広げにくいとの, 台地別層位編年のもつ弱点(西井, 2000: 55など)も受け継いでいたことは否めない。

複数遺跡間の連鎖は, 移動・居住形態と関わる論点である。一般に, 分布が広域に広がる石器群と局所的な石器群がある。具体例をあげるならば, 関東平野の全域と外縁部に分布し, 多様な石材を用いる砂川期石器群に対して, 相模野台地で時期的に後続するとされる黒耀石製の下九沢山谷型ナイフ形石器を組成する石器群の分布は, 愛鷹・箱根から相模野台地を中心とした局所に限られる(加藤, 2005; 鈴木, 2005など)。それぞれの石器群を形成した人類が認知していた生活空間の範囲が, そもそも異なっていた, つまり「地域」の範囲が石器群ごとに異なった可能性もあるのではないか。移動・居住形態や遊動範囲の議論に適した

空間範囲も, 両者では異なるかもしれない¹⁵⁾。

このように個別石器群の分布の実体に即して, 研究上の空間範囲を指定するイメージを図3の右に示した。対照例として図3の左に, 従来方式つまり編年の地域主義による把握を示した。編年の地域主義では, 台地や行政区分, 地方などの形で空間範囲をあらかじめ固定しておき, 内容の同じ石器群でも「地域」が異なると別の時期名を付与した。この方針で膨大な資料に秩序を与えることに成功したことは確かである。しかし行動論の前提としても適切かどうかは, また別の問題であろう。図3の左, 従来方式による整理にある程度の見通しが立ったならば, 次に行動論研究に進むために移行してゆくべきと筆者が考える状態が, 図3右である。図3右では, A-Eの異なる石器群がそれぞれ異なる固有の分布範囲をもつ。比喩的に述べると, 広域テフラの追跡・同定と似た思考と言えようか。もちろん一足飛びに図3右を描けるわけではなく, 先行研究による図3左の整理が一定の段階に達した後に, 図3右に至ることができる¹⁶⁾。すでに一部の個別石器群を対象として, こうした方向性の試みがある(角張, 1991; 吉川, 2002・2003など)。

ただし図3右では, 各石器群のいわゆる「系統関係」は表現していない。A石器群からB石器群への推移が, 在来集団からの内在的な変化なのか, それとも先行する集団の消滅と外来集団の移入なのかは不問としている。また各石器群の継続時間幅も捨象して, 厚みのない平面で表現したが, 実際には各石器群の継続期間が重なっていた可能

性や、長期継続した石器群の時間幅の内部で、短命な石器群が出現・消滅した可能性もある。各石器群の継続時間幅の把握は、年代測定例の蓄積も含めて今後の重要な課題となろう。さらに図化の都合上、各石器群の空間的ひろがりや、境界線で外縁を囲んだ「面の内部」で示した。しかし遊動集団の軌跡として想定すべきなのは、むしろ点と線、つまり良質な石材産地や狩場といった結節点と、それらを結ぶ線的な往還路であるとの指摘がある(安蒜, 1997; 国武, 2008 など)。今後は、このいわばイメージをいかに分析的に、将来の反証による改良が可能な形で記述するかが課題となる。その準備としても、図3右の形による把握が必要であろう。

地域別の段階編年では、異なるいくつかの人類集団が特定の地所を共同利用する、または往還路の軌跡が交錯するなどの結果として、同じ地点に異なる石器群が形成された場合を扱うことが困難となる¹⁷⁾。この状態を図4に模式的に示した。図4で▲と○は、異なる社会慣習や物質文化を持つ人類集団が、遊動生活上の各地点で形成した遺跡を表している。それぞれの固有の遊動範囲をもちながら図4の左下で交錯する。ここが重要資源の濃密なパッチや移動経路の要所といった、A・B両グループの行為痕跡が同時間(同時期)に重複する地所に相当する。台地や行政区分で「地域独自」の編年構築をめざしている範囲が左下のような地所を含むと、グループAとグループBを、「別時期」と見誤る編年案が提示されてもチェックしにくい。黒耀石原産地の付近などでは想定しやすいが、平野部の遺跡でもこうした可能性は排除できないと思われる。

①遊動範囲ひいては議論に有効な「地域」の範囲が石器群ごとに異なる可能性、②異なる集団の軌跡が同一地所で交錯した可能性、この2点は、編年の地域主義と段階編年では盲点となる。1960年代までの、素朴な全国編年へのアンチテーゼとしての編年の地域主義は、その理念や方向性としては間違っていない。「地域文化は地域的に固定されたものではなく、一中略一常に動態として現象する」(戸沢, 1986: 7)とも述べられている。しかし実践において「地域」を台地や行政区分などの形であらかじめ固定し、新しい調査事例はその中で編年的に振り分けた結果、空間範囲をめぐ

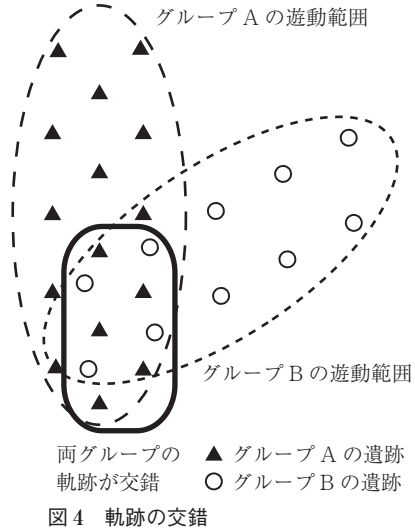


図4 軌跡の交錯

る議論は低調となった(伊藤, 1999)。むしろ石器資料から人類集団を同定するための本当に確実な方法は、今のところない。そこで実際の遊動範囲を同定することが難しいために、「同じ台地」の中には異なる遊動範囲を持ったさまざまな集団が残した資料が混在していることを受け入れつつ、そうした「同じ台地」内の資料でも議論できる課題設定をしている研究者もいるに違いない。けれども空間範囲の議論を回避する限り、遊動範囲をめぐる研究の進展にはつながらない。図3右の形を積極的に進めることで、資料の蓄積が新しい価値を持ってくると考える¹⁸⁾。

(3) 措定方法の可能性(素描)

編年の地域主義が言説空間を規定する前には、ナイフ形石器の仔細な特徴に共通点を認めて「並行期」を設定し、その並行期の先行型式と後続型式とを各地で判断するとの論法で、広域を扱う編年方法が提示されていた(佐藤, 1970)。石器群と層相とのセットを「時期」や「段階」とみならず論法ではないので、広い空間範囲や図4で示したような事態もあつかうことができる。こうした方法上の利点をもつ型式論によって、広域に石器群の関連を探る試みも、台地別層位編年を参照ないし一部を組み込んで模索されてきた(白石, 1973・1983; 田中, 1979・1984; 安蒜, 1986; 織笠, 1987d; 佐藤, 1991・1992; 須藤, 1991・2007; 竹岡, 2002・2003 など)。詳論には機会を改めるが、また行動論研究とは異なる研究目的や学的背景

(いわゆるパラダイム)によるものも含むとはいえ、図3右の形による空間範囲の措定を進める上で、参照すべき論点を個別には含んでいる。ただし型式論によって空間範囲をさぐる上でも、ナイフ形石器など石器の単体を示準的に扱うだけでは不十分である。個別の石器形態は、「システム」の中で生じるものであるから(佐藤, 2007)、単品ではなく「システム」を把握し、それが共通する空間範囲をさぐるのが好ましい。具体的には、示準的な石器の型式にくわえて、石器群の技術構造と石材運用への着目が実践的と考えている¹⁹⁾。

ところで「編年においては層位のみを偏重せず、型式論を重視する」との主張は、個別引用が困難なほど繰り返し表出されてきた(端的には田中, 1984; 竹岡, 2005 など)。その一方、石器は土器や金属器などとは異なり、製作・使用者を取り巻く外的因子が形態の形成や変異に与える影響が強いとの指摘も繰り返されている(五十嵐, 2002; 松本, 2003; 佐藤, 2007 など)。型式論で時間軸上の編年細別を進めることが、石器資料では方法的にどこまで可能で、どこから不相当となるのか、粘り強い議論を重ねることが望まれる。これとは別に、地学的に有意な層位的出土例や、人類活動とのコンテクストに信頼性の高い試料による数値年代など、型式論的推論からは完全に独立した系のクロスチェックを用意することは、他者による再現可能性や、将来の反証可能性を付与できる²⁰⁾。空間範囲をさぐる上でも、行為痕跡の単位性への配慮は必要であることはいまでもない。行動論のツールのひとつとして型式論を活用するには、こうした点への補足が重要となると考える。

(4) 未発達の研究領域

図5にまとめとして、研究動向の推移を示した。横軸は1970年から2010年までの時間軸、縦軸は広がり異なる空間範囲である。図5左の1970-80年代に、編年の地域主義が台地別層位編年を編成し、あわせて編年研究と一体化して「文化層」に分離する報告書書式が普及した。また小稿では立ち入っていないが、個別別資料分類による「遺跡の構造分析」²¹⁾も普及した(鈴木編, 1980; 栗島, 1986 など)。台地や「地域」を超えた広域を扱う研究は、この頃には「他地域との編年対比」とのコンテクストで遂行されていたようである。次に図5中の1990年代後半からは、「遺

跡の構造分析」の延長線上に複数遺跡の関係の追及が進んだ。移動・居住形態に関する行動論研究の先駆けと見ることもできる一方で、報告書の「文化層」や台地別層位編年を踏襲したものであった。やがて図5右の2000年代以後には、石材に着目して台地を超える広域に遊動範囲を探る研究が活性化する(国武, 2007・2008; 田村・国武ほか, 2003; 田村, 2005 など)。この流れと並行して、「文化層」よりも微視的な空間・時間範囲の行動論につながり得る、微細遺物の分布も検討され続けている。

こうして、いくつもの異なる空間的ひろがりの階層で行動論が展開されると、「文化層」による報告書書式とは整合しがたい部分も生じよう。遺跡形成論を進めると、段階編年と一体化した形のコンポーネント分離が妥当でない条件も、次第に明らかになるに違いない。下原・富士見町遺跡はその嚆矢となる可能性がある。新しい発掘調査を実施する機会に、調査・記録方法や分析・報告書書式を工夫し続けることは重要である。しかし開発行為にともなう発掘調査機会は今後、減少してゆく。報告書で一度示された単位を事後的に、繰り返し再検討することを前提とした収蔵管理や、社会的な仕組みの実現を求める希望(織笠, 2005; 中沢, 2008 など)も、さらに切実になると思われる。

ところで、発掘調査の大半が埋蔵文化財の記録保存という社会的・経済的背景は、こうした業務と直接むすびつかない、あるいは馴染みにくい研究領域を結果として未発達にとどめたことにも目を向けたい。石器認定論(山岡, 2005 など)や偽遺構、埋没プロセスにおける遺物の移動と再配置など(御堂島, 1991)、自然現象から説明すべき、言い換えると「文化財」ではない部分とも大きく重なる課題について、研究の蓄積は進んでいない。また開発行為の対象となりにくい地域や地形、立地条件の遺跡を発掘調査する機会も限られてきた。具体的には、河成段丘の風成層に包蔵されるという限定的な条件の調査事例ばかりが多い一方で、地滑り地形や崩積成堆積物を含む山地や、斜面地に立地する遺跡の調査事例は少なく、そうした遺跡の形成過程についての理解は蓄積されていない。

先に指摘した「文化層」よりも微視的な行為痕

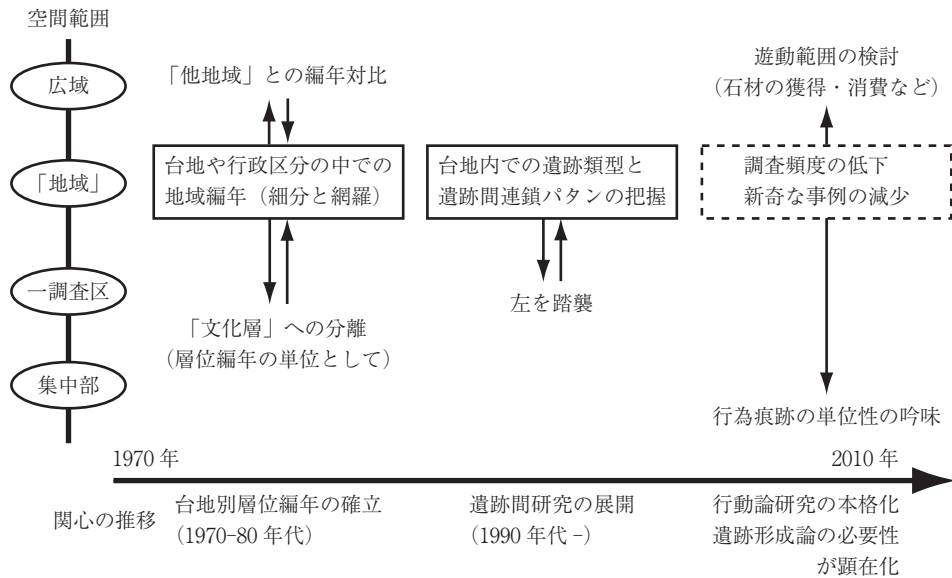


図5 研究動向の推移

跡や、行政区分を大きく超えた空間範囲の扱い方も、やはり同様に未発達となってきた研究領域であろう。前者は日常的な報告書作成業務の中には組み込みがたいし、後者は行政体による文化財管理や、研究者のこれまでの雇用・就業形態と馴染みにくい面をもつ。長い年月をかけた実践の中で自生してきた秩序を、一気に破壊することは現実的ではないが、小稿で指摘した問題点に方向修正を加え続けることで、自然環境と人類活動の相互作用システムという普遍的な研究課題への接続が、相応の時間をかけて可能となってゆくと考え。

おわりに

編年研究と不可分な報告書の「文化層」と、編年の地域主義による台地や行政区分といった現代社会の「地域」。1970-80年代に確立したこれらの前提は、埋蔵文化財の記録保存が発掘調査の主体という特殊な社会的・経済的背景に由来し、膨大な発掘資料を秩序づける必要ないし目的で言説空間を配置した。しかし、自然環境と人類活動との相互作用システムを論じる上で必要となる行動論とは、そのままの形では整合しにくい。行動論研究を進めるには、遺跡形成論による行為痕跡単位の把握と、型式論や石器群構造、石材運用などによる空間範囲の措定が重要になると提起した。身近な実践機会の中で、試行を重ねたい。

明治大学校地内遺跡調査団の安蒜政雄団長、野口淳、藤田健一の諸氏からは、日頃よりご教示と文献の提供を頂いている。忍路子研究会の山岡拓也、岩瀬彬の両氏には草稿への建設的なコメントを賜った。末筆ではありますが記して感謝いたします。ただし誤りや不十分な点については、すべて筆者個人の責任である。

注

- 1) 下原・富士見町遺跡の報告は別途、調査団メンバーと協議しながら準備を進めている。小稿では学説史と方法論について、筆者個人の考えを述べる。
- 2) 尖頭器石器群以後の学説史には私見がある(長沼, 2005)。旧稿で指摘した狩猟具発展史観、一国史的前提、文化史的アプローチと史的唯物論の結合は、小稿で対象とする範囲にも共通する。今回は立ち入らず詳論には機会を改めたい。
- 3) 野川遺跡は当初、第四紀研究誌上でIVc層の内部にIV3a, IV3b, IV4と3枚のコンポーネントが細別されていた(小林・小田ほか, 1971)。しかし同年の概報では、IV3aとIV3bは統合され、IV-3とIV-4の2枚のコンポーネントとして報告されている(小田, 1971)。石器群と層相の一对一の対応関係には、細別を志向したゆらぎがあった旨の指摘がある(飯田, 2008)。
- 4) 時間区分と時期区分を分けて考える(御堂島,

- 2003) と理解しやすい、層相とのセット関係は時間区分に関するもので、石器群の評価は時期区分に関するものである。
- 5) 鶴丸俊明は、多聞寺前遺跡の IV 層で石器点数が多い集中部ほど垂直方向への分布幅が広いことを示した(鶴丸, 1983)。逆に点数が少ない集中部では、狭い垂直幅を操作しやすいためが多いが、少ない母集団となる点に統計的な問題が残る。埋没後擾乱の強度や程度が個別に異なっていた結果、垂直分布幅や分布形は多様となる(中沢, 2000; 藤田, 2008 など)。
 - 6) 野川流域遺跡群のはけうえ遺跡では、「石器・礫集中部の中には、「遺物群の層位」の境界線を超えて分布するものもあるが、これらは垂直分布の最も密集するレベルが位置する「遺物群の層位」に含まれることになる」との記載がある(小田・阿部ほか編, 1980: 13)。
 - 7) 個別・母岩別分類をめぐる、①分類の妥当性や再現性、②解釈の導出手順の問題が指摘されてきた(橋本, 1992; 栗島, 1992; 岩崎, 1992; 小野, 1995; 五十嵐, 2000a など)。仮に①について妥当な分類が果たせても、地学的由来(成因や地点)を同じくする石片が、異なる時間に生じた人類活動エピソードの結果、発掘調査区内に近接して残された可能性は残る。つまり②について、同じ質の石片でも接合しない場合には単一の原石に由来するとは限らないし、さらに接合して単一の原石となる場合さえ、実際に一緒に打ち割られたものと証明はできない(安蒜, 2008: 203-204)。石器集中間の同時性の確認や「文化層」の分離に際し、こうした限界をもつ個別資料の共有関係に強く依拠すると、資料性の限界から逸脱してゆく。注 21 とも関連する。
 - 8) Phase III と Phase IV の区分は、「層位的には分けられない」との記載に始まる(小田・キーリー, 1973)。やがて西之台遺跡 B 地点などの成果をうけ、「Phase III は III 層中部、Phase IV は III 層最上部」と層位編年的な記述に変更された(小田, 1980a・b)。しかし武蔵野台地で考古層序区分の III 層は、波状帯と「漸移層」の間のソフトロームに相当し、層厚は微地形などにも規定されて変異に富む。青柳ロームや「漸移層」との分層基準も再現性に問題がある。III 層として把握した内部で上部・中部・下部といった判断を、複数の発掘調査区に共通した時間区分の根拠とするのは無理があるとの指摘がある(羽鳥, 1983)。
 - 9) 「文化層」の用語をめぐる問題点は、五十嵐彰が整理している(五十嵐, 2000b)。1980年代以後の報告書で広く使用される「文化層」は、編年研究との関連が強いとの指摘を(栗島, 1999 など)、小稿でも改めて重視しておきたい。
 - 10) 個別の「文化層」を、どの時期区分に位置づけるかの判断は研究者によって異なる場合もある(五十嵐, 1998 など)。時期区分においても、諏訪間 12 段階編年という段階 I と II の扱い、段階 V の細別、段階 VII の扱いは議論がわかれる。後 2 者は 1970 年代末(鈴木・矢島, 1979 など)から、今日に至るまで継続中の争点である。
 - 11) ひとつの遺跡(発掘調査区)や「文化層」に、異なる人類集団の行為痕跡が複数、重ね書かれている可能性に敏感なのは竹岡俊樹である(竹岡, 2003・2005)。注 16 で触れる田中英司も同様である。両氏は型式論の重要性を擁護する姿勢で共通する。型式論的に異なると判断した石器が、同一の層位から出土した場合には、石器が違うとの認識を優先する思考である。注 21 とも関連する。
 - 12) 北海道の旧石器遺跡で炉址周辺について試されている、石器集中とは別の空間構成要素を起点とした行為復元も参考になる(山田, 2000・2003; 中沢, 2008 など)。関東平野南部では可視的な炉の調査例は少ないが、被熱石器の分布検討や、台石を中心とした行為復元は実施できる条件にある。
 - 13) このシノニム的な用法は、時期区分名のほかに、ナイフ形石器の細別型式ないし形態(第 I 形態・第 II 形態と第 1 形態・第 2 形態や、A, B, C, D, E 類など)、集中部の呼称(ユニット)でも、同じような・時には全く同じ記号(単語)を用いて、異なる定義や用法がみられる。
 - 14) X 層段階, IX 層段階, VII 層段階, VI 層段階, V 層・IV 下層段階など。細別の連辞もある(IX 層下部段階など)。この用法は、石器文化研究会による「AT 降灰以前の石器群」の検討で広く共有されていったとされる(伊藤, 1990; 亀田, 1999; 小菅, 1999)。ゆるやかな把握に留めている分には、研究者間のコミュニケーションに便利との利点は疑いない。しかし同じ命名法で編年細別を進めると、注 20 で述べる問題が生じる。
 - 15) 台地や行政区分など現代社会の「地域」ではなく、石材に着目して当時の人類の活動範囲をさぐる試み(田村, 2003・2005; 田村・国武ほか, 2003; 国武, 2007・2008 など)は、注 20 や別稿(野口・長沼ほか, 2008)で指摘した課題はあるが、空間範囲を措定する方向性のひとつとしての意義は大きい。

- 16) 田中英司が1984年の時点で「砂川型式期」を広域にさぐった試みは(田中, 1984), 図3左の形による整理はまだ十分ではない中で, 図3右に近いイメージを実行したといえよう。行動論を目的としたものではないが, 一遺跡や「文化層」の全体ではなく個別の石器集中を検討の単位に置くなど, 小稿の立場からも参考になる論点を含む。
- 17) 相模野編年では「第V期の石器群の推移が二通りみられるが, 同時期に性格の異なった石器群が併存するということは何を意味するものであろうか。この狭い相模野台地の中に, 異なった石器群をもった(文化の異なる)2つの集団が生活していたことはまず考えられず」(矢島・鈴木, 1976: 22-23)と言及の上で短く却下されている。北海道帯広市の大正3遺跡は, いわゆる「異系統石器群」を考える上で示唆に富む(帯広市教育委員会, 2006)。非・細石刃の石器群(おそらくポスト細石刃石器群)と本州的な爪形紋土器のセットに, 当地では細石刃石器群に相当する14C年代(土器附着炭化物)が得られた。空間範囲を固定した内部を段階的に整理するならば, 「縄文時代草創期段階」に先行するはずの「細石刃石器群段階」の時間幅を, 全体として短く圧縮する必要が生じてしまう(山原, 2008: 41-42)。この事例は, 空間範囲を固定する必要や, その中を段階として整理する必要はないことを示しているかに見える。
- 18) 石器資料による人類集団の同定は, 追証や反証がきわめて困難である。ただしこのことが, 台地など現代社会の「地域」に空間範囲を固定した研究だけで必要にして十分, とする姿勢を擁護ないし正当化することには, つながらないと考える。
- 19) 筆者は札幌型細石刃核に関連する石器群を扱い, 示準的な器種の型式に加えて技術構造と石材運用に着目し, 台地や行政区分, 「地方」を超えた検討を試みた(長沼, 2008)。そこでは「ある地域」の「細石器文化」の内部を「段階的に細別編年する」との思考を回避した。同様にして, いわゆる「ナイフ形石器文化」の内部の諸階梯として整理されてきた各石器群についても, それぞれ個別に検討していったら良いとイメージしている。
- 20) 堆積が薄い下総台地などを含めて, AT降灰以前を6段階に細別する議論(国武, 2004), 主として型式論的推論によりX層段階とIX層段階をあわせた内部を5段階に細別する議論がある(小菅・麻生, 2006)。こうした細別は, それだけでは認識を他者と共有することが困難と思われる。風成層を暗色帯

などで識別した考古層序区分(IX層など)の内部において, 下底・下面・最下部・下部・中部・上部・最上部・上面・最上面などと出土レベルを仔細にとらえても, 現象の表面的な観察にすぎず, レベル差=時間差と理解するには, 埋没後擾乱の程度を個別に吟味することが不可欠である。こうした問題点に配慮して, 国武とほぼ同じ時間範囲の石器群について, 堆積がより厚い武蔵野台地でも, 半分の3期が妥当とする判断もある(山岡, 2008・2009)。

21) 「遺跡の構造分析」も遺跡形成論の一種ではある。ほぼ同時代の, 野川流域遺跡群における場の機能の単純な類型化や, 考古学研究会による観念的な集団論への批判として, 遺跡・遺物から詳細情報を抽出し議論を組み立てる方向性が追求された(矢島・鈴木, 1976; 矢島, 1977)。この方向性そのものは, 否定されるべきではない。しかし「一遺跡一文化層」と見なした複数の石器集中を集落やムラと仮定する時, 時間をかけて慎重に答えをさぐるべき, いわば遠くに目指す結論や場合によっては棄却すべき仮説にあたる内容を, スタート時点で自明視してしまうことになる。その結果, 異なる時間や人類集団の行為痕跡が重ね書かれている可能性の追求に閉じてしまう。この点で行為痕跡の単位性をさぐる目的には, そのままの形では不適である。注7とも関連する。また層位を基準とした段階編年と不可分の論理構成をもつ(矢島, 2005)。

引用文献

- 阿部祥人(1983) ローム層と文化層。神奈川考古, 16, 34-35。
- 阿子島香(1983) ミドルレンジセオリー。芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会編「考古学論叢 I」: 171-197, 寧楽社。
- 阿子島香(1989) 石器の使用痕。95p, ニューサイエンス社。
- 安蒜政雄(1977) 遺跡の中の遺物。季刊どるめん, 15, 50-62。
- 安蒜政雄(1986) 先土器時代の石器と地域。近藤義郎・横山浩一・甘粕 健・加藤晋平・佐原 眞・田中 琢・戸沢充則編「岩波講座日本考古学5文化と地域性」: 27-60, 岩波書店。
- 安蒜政雄(1997) 旧石器時代の集団—南関東の移動生業集団と石器製作者集団—。駿台史学, 100, 147-172。
- 安蒜政雄(2008) 総評—旧石器時代研究の指標—。比田井民子・伊藤 健・西井幸雄編「考古学リーダー

- 14 後期旧石器時代の成立と古環境復元」: 201-204, 六一書房.
- 安森政雄・戸沢充則 (1975) 砂川遺跡. 麻生優・加藤晋平・藤本強編「日本の旧石器文化 2 遺跡と遺物〈上〉」: 158-179, 雄山閣.
- 安斎正人 (1990) 無文字社会の考古学. 286p, 六興出版.
- 安斎正人 (2003) 旧石器社会の構造変動. 310p, 同成社.
- 安斎正人 (2007) 「ナイフ形石器文化」批判—狩猟具の変異と変遷— (前編). 安斎正人編「考古学」V, 1-32.
- 安斎正人 (2008) 「ナイフ形石器文化」批判—狩猟具の変異と変遷— (後編). 安斎正人編「考古学」VI, 119-135.
- 荒井幹夫 (1979) 武蔵野台地東部地域の第 II 期の石器群. 神奈川考古, 7, 49-64.
- 新井 悟 (2007) 考古学者はなぜ壁に線をひいたのか. 明治大学校地内遺跡調査団年報, 4, 78-82.
- 新井 悟・石川博行・玉井久雄・野口 淳・平井義敏 (2005) 明治大学付属明治高等学校・明治中学校建設予定地試掘・確認調査の概要. 明治大学校地内遺跡調査団年報, 2, 16-48.
- 新井 悟・野口 淳・藤田健一・品川欣也・遠竹陽一郎 (2006) 明治大学付属明治高等学校・明治中学校建設予定地本発掘調査の概要. 明治大学校地内遺跡調査団年報, 3, 12-34.
- 荒川章二 (2009) 日本の歴史 16—豊かさへの渴望—. 382p, 小学館.
- 藤野次史 (1992) シンポジウム「AT 降灰以前の石器文化」に参加して. 石器文化研究, 4, 114-117.
- 藤田健一 (2008) 先土器時代の複数文化層遺跡における諸問題. 比田井民子・伊藤 健・西井幸雄編「考古学リーダー 14 後期旧石器時代の成立と古環境復元」: 83-93, 六一書房.
- 橋本勝雄 (1991) 下総台地の様相. 石器文化研究, 3, 37-50.
- 橋本勝雄 (1992) 栗島義明氏へのコメント. 石器文化研究, 4, 101-102.
- 橋本勝雄 (1995) 茨城の旧石器時代. 茨城県考古学協会誌, 7, 1-111.
- 橋本勝雄 (2002) 茨城県における旧石器時代の編年. 「シンポジウム茨城県における旧石器時代研究の到達点—その現状と課題—発表要旨・資料集」: 5-18, ひたちなか市教育委員会・茨城県考古学協会.
- 羽鳥謙三 (1983) 白石論文に対する論評. 第四紀研究, 22 (3), 199-200.
- 服部実喜 (1981) 武蔵野台地における先土器時代石器群出現期の一様相—ナイフ形石器のあり方をめぐって—. 神奈川考古, 12, 1-26.
- 林 和広 (2007) コラム: 下原・富士見町遺跡. 佐藤宏之編「ゼミナール旧石器考古学」: 123-125, 同成社.
- Hofman, J. L. (1992) Defining Buried Occupation Surfaces in Terrace Sediments. *Piecing Together the Past: Applications of Refitting Studies in Archaeology*. BAR International Series 578, 128-150.
- 飯田茂雄 (2008) 後期旧石器時代後半期の武蔵野編年に関する諸問題. 比田井民子・伊藤健・西井幸雄編「考古学リーダー 14 後期旧石器時代の成立と古環境復元」: 72-82, 六一書房.
- 五十嵐彰 (1998) 「慶応藤沢第 V 文化層こうもり論」の提唱—範囲と細分についてのコメントに代えて—. 石器文化研究, 6, 114-117.
- 五十嵐彰 (2000a) 接合. 安斎正人編「用語解説現代考古学の方法と理論 II」: 164-175, 同成社.
- 五十嵐彰 (2000b) 「文化層」概念の検討—旧石器資料報告の現状 (II) 一. 旧石器考古学, 60, 43-56.
- 五十嵐彰 (2002) 型式と層位の相克—石器と土器の場合—. 「日本第四紀学会・日本学術会議第四紀研究連絡委員会共催シンポジウム 2002 旧石器時代研究の新しい展開を目指して—旧石器研究と第四紀学—」: 13-24, 日本第四紀学会.
- 井川史子 (1976) 旧石器文化研究の方法論. 麻生優・加藤晋平・藤本強編「日本の旧石器文化 5 旧石器文化の研究法」: 19-70, 雄山閣.
- 稲田孝司 (1984) 旧石器時代武蔵野台地における石器石材の選択と入手過程. 考古学研究, 30 (4), 17-37.
- 伊藤 健 (1990) ナイフ形石器文化の画期と変容. 物質文化, 54, 1-14.
- 伊藤 健 (1991) ナイフ形石器の変異と変遷. 研究論集 X 創立 10 周年記念論文集, 東京都埋蔵文化財センター, 82-107.
- 伊藤 健 (1999) 地域区分論—地域差研究・地域性研究・2 万年前の地理学—. 石器文化研究, 7, 201-210.
- 伊藤 健 (2003) 相模野旧石器編年研究の到達点と未到達点. 考古論叢神奈河, 11, 188-190.
- 伊藤 健 (2007) ナイフ形石器文化研究の形成過程—V 層・IV 層下部段階の解体へ向けて—. 旧石器研究 3, 111-126.

- 伊藤 健 (2008) 石器文化編年と遺跡形成過程論—V 層・IV 層下部段階の解体へ向けて II—. 石器に学ぶ, 10, 19-42.
- 岩崎泰一 (1992) 後期旧石器時代に於ける集落・集団研究の現状認識. 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要, 9, 1-22.
- 角張淳一 (1991) 黒曜石原産地遺跡と消費地遺跡のダイナミズム—後期旧石器時代石器群の行動論的理解—. 先史考古学論集, 1, 25-82.
- 亀田直美 (1999) ナイフ形石器文化後半. 石器文化研究, 7, 115-128.
- 神奈川県教育委員会 (1980) 寺尾遺跡, 293p+PL26.
- 樫田 誠 (1987) 神奈川県深見諏訪山遺跡第 III 文化層のナイフ形石器と槍先形尖頭器. 大和市史研究, 13, 74-106.
- 加藤勝仁 (2005) 終末期ナイフ形石器. 石器文化研究, 12, 173-178.
- 河本雅人・河尻清和・川本真由美・坂下貴則・佐野勝宏 (2005) 古淵 B 遺跡旧石器時代資料再整理調査報告書. 80p, 相模原市立博物館.
- 小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 (1971) 野川先土器時代遺跡の研究. 第四紀研究, 10 (4), 231-252.
- 小平市鈴木遺跡調査会 (1976) 鈴木遺跡 I 流域下水道建設工事とともなう緊急発掘調査報告書. 16p+PL28.
- 小平市鈴木遺跡調査会 (1978) 鈴木遺跡 II 都市計画道路小平 2・1・3 号線内, 446p+PL53.
- 小菅将夫 (1999) ナイフ形石器文化前半. 石器文化研究, 7, 103-114.
- 小菅将夫・麻生敏隆 (2006) 関東地方を中心とした岩宿時代 I 期の予察的細分編年. 岩宿フォーラム実行委員会編「岩宿フォーラム／シンポジウム 岩宿時代はどこまで遇れるか—立川ローム層最下部の石器群—予稿集」: 76-83, 岩宿博物館・岩宿フォーラム実行委員会.
- 国武貞克 (1999) 石材消費と石器製作, 廃棄による遺跡の類別—行動論的理解に向けた分析法の試み—. 考古学研究, 46 (3), 35-55.
- 国武貞克 (2004) 石刃生産技術の適応論的考察—房総半島 IX 層の石刃生産技術の変遷—. 安斎正人編「考古学」II, 76-92.
- 国武貞克 (2007) 第 7 章石材と行動. 佐藤宏之編「ゼミナール旧石器考古学」: 129-144, 同成社.
- 国武貞克 (2008) 回廊領域仮説の提唱. 旧石器研究, 4, 83-98.
- 栗原伸好 (1999) 層位論. 石器文化研究, 7, 211-220.
- 栗原伸好 (2003) 相模野旧石器編年と層位. 考古論叢 神奈河, 11, 195-196.
- 栗島義明 (1983) ナイフ形石器の形態組成の変遷とその意義. 人間・遺跡・遺物 I, 25-40.
- 栗島義明 (1986) 先土器時代遺跡の構造論的研究序説. 土曜考古, 11, 55-87.
- 栗島義明 (1992) 橋本氏見解に触れて. 石器文化研究, 4, 105-106.
- 栗島義明 (1999) 遺跡構造研究が明らかにしたもの. 旧石器考古学, 58, 99-107.
- 前原 豊 (1994) 群馬の石器群編年を行うにあたって. 「第 2 回岩宿フォーラム・シンポジウム群馬の岩宿時代の変遷と特色—予稿集—」: 16-19, 笠懸野 岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良 Tn 火山灰の発見とその意義—. 科学, 46 (6), 339-347.
- 町田 洋・鈴木正男・宮崎朋子 (1971) 南関東の立川・武蔵野ロームにおける先土器時代遺物包含層の編年. 第四紀研究, 10 (4), 290-305.
- 松本 茂 (2003) 石器のかたちはどのように決まるか—石器製作行為をめぐる人間の認知—. 松本直子・中園聡・時津裕子編「認知考古学とは何か」: 54-70, 青木書店.
- 明治大学・月見野遺跡調査団 (1969) 概報月見野遺跡群. 38p.
- 道澤 明 (1992) 火山灰層の比定について. 石器文化研究, 4, 16.
- 御堂島正 (1991) 考古資料の形成過程と自然現象. 古代探叢 III, 651-668.
- 御堂島正 (2002) 遺跡形成論からみた堆積物としての遺物. 「日本第四紀学会・日本学術会議第四紀研究連絡委員会共催シンポジウム 2002 旧石器時代研究の新しい展開を目指して—旧石器研究と第四紀学—」: 2-12, 日本第四紀学会.
- 御堂島正 (2003) 時間軸としての編年の可能性. 考古論叢神奈河, 11, 184-187.
- 森先一貴 (2007) 角錐状石器の広域展開と地域間変異—西南日本後期旧石器時代後半期初頭の構造変動論的研究—. 旧石器研究, 3, 85-109.
- 長沼正樹 (2005) 日本列島における更新世終末期の考古学的研究—縄文文化起源論と旧石器終末期研究の学説史に着目して—. 論集忍路子 I, 57-73.
- 長沼正樹 (2008) 両面石器リダクションの事例 (1)—札滑型細石刃核に関連する石器群—. 論集忍路子

- II, 125-150.
- 長沼正樹・野口 淳・藤田健一・安藤政雄・明治大学校地内遺跡調査団 (2008) 東京都下原・富士見町遺跡の旧石器接合資料. 日本第四紀学会 2008 年大会講演要旨集, 84-85.
- 中村喜代重 (1979) 神奈川県相模原市下九沢山谷遺跡の石器群. 神奈川考古, 7, 89-116.
- 中村雄紀 (2007) 第 10 章編年. 佐藤宏之編「ゼミナール旧石器考古学」: 179-194, 同成社.
- 仲田大人 (2007) 第 9 章社会と生態. 佐藤宏之編「ゼミナール旧石器考古学」: 163-178, 同成社.
- 中沢祐一 (2000) 遺物重量と遺物の上下拡散—石器群垂直分布の多角的分析による「生活面」の認定—. MICROBLADE, 1, 32-53.
- 中沢祐一 (2008) 北海道勇払郡厚真町上幌内モイ遺跡旧石器地点における居住史. 論集忍路子 II, 63-81.
- 西藤清秀 (1983) 考古学的状況と体系的状況. 榎原考古学研究所紀要考古学論巧, 9, 124-139.
- 西井幸雄 (2000) 「砂川」の空間的枠組みをめぐって. 石器文化研究, 9, 53-74.
- 西井幸雄 (2008) 後期旧石器時代遺跡の文化層の諸問題. 比田井民子・伊藤 健・西井幸雄編「考古学リーダー 14 後期旧石器時代の成立と古環境復元」: 41-49, 六一書房.
- 野口 淳 (1995) 武蔵野台地 IV 下・V 上層段階の遺跡群—石器製作の工程配置と連鎖の体系—. 旧石器考古学, 51, 19-36.
- 野口 淳 (2003) 日本列島における後期旧石器時代遺跡の研究—「砂川・野川」以後への展望—. 「旧石器人たちの活動をさぐる—日本と韓国の旧石器研究から—講演会・シンポジウム予稿集」: 149-152, 大阪市学芸員等共同研究「朝鮮半島総合学術調査団」.
- 野口 淳 (2005) 旧石器時代遺跡研究の枠組み—いわゆる「遺跡構造論」の解体と再構築—. 旧石器研究, 1, 17-37.
- 野口 淳 (2007) 第 5 章遺跡の空間分析. 佐藤宏之編「ゼミナール旧石器考古学」: 91-109, 同成社.
- 野口 淳・林 和広 (2006) 明治大学調布附属校用地の遺跡 (仮称) における遺跡形成過程論の研究—ジオアーケオロジー調査方法の確立に向けて—. 明治大学校地内遺跡調査団年報, 3, 37-44.
- 野口 淳・林 和広 (2008) 下原・富士見町遺跡. 比田井民子・伊藤 健・西井幸雄編「考古学リーダー 14 後期旧石器時代の成立と古環境復元」: 144-160, 六一書房.
- 野口 淳・長沼正樹・藤田健一・林 和広 (2008) 多摩川流域の石材 (1) —検討の枠組み—. 石器文化研究, 13, 3-12.
- 野口 淳・山田しょう・長沼正樹・藤田健一・山岡拓也・宇賀神弘・遠竹陽一郎 (2007) 明治大学付属明治高等学校・明治中学校建設予定地本発掘調査の概要 2006 年度. 明治大学校地内遺跡調査団年報, 4, 13-32.
- 帯広市教育委員会 (2006) 帯広・大正遺跡群 2. 464p.
- 小田静夫 (1971) 第 3 章遺物について. 野川遺跡調査会編「野川遺跡調査概報」, 野川遺跡調査会, 6-7.
- 小田静夫 (1979) 広域火山灰と先土器時代遺跡の編年—特に AT について—. 史館 11, 1-16.
- 小田静夫 (1980a) 武蔵野台地に於ける先土器文化. 神奈川考古, 8, 11-27.
- 小田静夫 (1980b) 武蔵野台地の火山堆積物と遺跡. 月刊考古学ジャーナル, 178, 12-20.
- 小田静夫 (2009) 武蔵野台地から日本人の起源を探る. 明治大学校地内遺跡調査団年報, 5, 41-46.
- 小田静夫・阿部祥人・中津由紀子編 (1980) はけうえ. 国際基督教大学考古学研究センター, 408p+PL126.
- 小田静夫・C. T. Kealy (1973) 武蔵野公園遺跡 I. 野川遺跡調査会, 57p+PL14.
- Oda, S. C. T. Kealy (1975) Japanese Pre-ceramic Cultural Chronology. 25p. Archaeological Research center, International Cristian University.
- 岡澤祥子 (1995) 極微細石片の分析. 「南葛野遺跡」: 581-595, 南葛野遺跡発掘調査団.
- 岡澤祥子 (2000) 旧石器時代研究における極微細石片の役割—石器製作実験に基づく検討—. 第四紀研究, 39 (5), 479-486.
- 小野 昭 (1969) ナイフ形石器の地域性とその評価. 考古学研究, 16 (2), 21-45.
- 小野 昭 (1976) 後期旧石器時代の集団関係. 考古学研究, 23 (1), 9-22.
- 小野 昭 (1977) 学史整理の方法について. 考古学研究, 24 (3・4) 「大森貝塚発掘 100 年記念特集」, 147-151.
- 小野 昭 (1995) 旧石器時代集団論の現状分析. 考古学研究会編「展望考古学」: 17-23, 考古学研究会.
- 小野 昭 (2009) 東アジアへの新人の拡散と OIS3 の日本列島: 趣旨説明. 「シンポジウム東アジアへの新人の拡散と OIS3 の日本列島」: 1-2, 日本第四紀学会研究委員会「東アジアにおける酸素同位体ステージ 3 の環境変動と考古学」.
- 小野正敏・鈴木次郎・高橋芳宏・矢島國雄・坂入民子 (1972) 小園前畑遺跡発掘調査報告書. 32p, 綾瀬

- 町教育委員会.
- 織笠明子 (2005) 砂川遺跡研究覚書. 明治大学考古学研究室編『地域と文化の考古学 I』: 791-806, 六一書房.
- 織笠 昭 (1980) 2. 各地域における研究の現状と課題 (武蔵野台地南部). 神奈川考古, 8, 33-36.
- 織笠 昭 (1987a) 相模野尖頭器文化の成立と展開. 大和市史研究, 13, 44-73.
- 織笠 昭 (1987b) 殿山技法と国府型ナイフ形石器. 考古学雑誌, 72 (4), 1-38.
- 織笠 昭 (1987c) 国府型ナイフ形石器の形態と技術 (上). 古代文化, 39 (10), 8-23.
- 織笠 昭 (1987d) 国府型ナイフ形石器の形態と技術 (下). 古代文化, 39 (12), 15-30.
- 織笠 昭 (1991) 先土器時代人の生活領域—集団移動と領域の形成—. 日本村落史講座編集委員会編『日本村落史講座 6 生活 I 原始・古代・中世』: 3-26, 雄山閣.
- ポパー, K. R. (1995) (小河原誠・蔭山泰之訳) よりよき世界を求めて. 383p, 未來社.
- 坂下貴則 (2005) 文化層設定の方法論的検討. 河本雅人・河尻清和・川本真由美・坂下貴則・佐野勝宏「古淵 B 遺跡旧石器時代資料再整理調査報告書」: 71-79, 相模原市立博物館.
- 佐藤宏之 (1983) 水洗選別による先土器時代の資料分析—遺跡の空間分析の一方法として—. 「多聞寺前遺跡 II」: 567-610, 多聞寺前遺跡調査会.
- 佐藤宏之 (1991) 日本列島内の様相と対比—二極構造論の展開—. 石器文化研究, 3, 129-140.
- 佐藤宏之 (1992) 日本旧石器文化の構造と進化. 362p, 柏書房.
- 佐藤宏之 (2007) 第 I 章分類と型式. 佐藤宏之編「ゼミナール旧石器考古学」: 15-31, 同成社.
- 佐藤宏之 (2009) 地考古学が日本考古学に果たす役割. 第四紀研究, 48 (2), 77-83.
- 佐藤宏之・工藤敏久 (1989) 遺跡形成論と遺物の移動—石器製作空間の実験考古学的研究—. 古代文化, 41 (5), 28-37.
- 佐藤達夫 (1970) ナイフ形石器の編年的一考察. 東京国立博物館紀要, 5, 23-76.
- 沢田 敦 (2001) 技術的組織と石器製作技術構造—『第 3 部「砂川」とは何か?』に対するコメントとして—. 石器文化研究, 10, 41-48.
- 芹沢長介 (1967) 日本における旧石器の層位的出土例と 14C. 東北大学日本文化研究所研究報告, 3, 59-109.
- 島田和高 (1998) 中部日本南部における旧石器地域社会の様相—砂川期における地域区分の成り立ちと地域の構造—. 駿台史学, 102, 1-48.
- 白石浩之 (1973) 茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論—特に関東・中部地方を中心として—. 物質文化, 21, 41-55.
- 白石浩之 (1983) 考古学と火山灰層序—特に関東地方を中心とした旧石器時代の層位的出土例と石器群の様相—. 第四紀研究, 22 (3), 185-193.
- 白石浩之 (1993) いわゆる砂川期の再検討. 國學院大學考古学資料館紀要, 3, 1-26.
- 白石浩之 (2003) ナイフ形石器文化終末期の石器群—いわゆる月見野期について—. 第 9 回石器文化研究交流会発表要旨, 47-52.
- 静岡県考古学会シンポジウム実行委員会編 (1996) 愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年. 予稿集 363p. 収録集 189p.
- 杉原荘介 (1956) 群馬県岩宿発見の石器文化. 63p+PL20, 吉川弘文館.
- 杉原荘介編 (1965) 日本の考古学 I 先土器時代. 427p+PL20, 河出書房新社.
- 須藤隆司 (1991) ナイフ形石器文化の成立. 石器文化研究, 3, 249-258.
- 須藤隆司 (2007) 日本後期旧石器時代の狩猟用石器—形態的範疇と型式的意義—. 旧石器研究, 3, 15-33.
- 諏訪間順 (1988) 相模野台地における石器群の変遷について—層位的出土例の検討による石器群の段階的把握—. 神奈川考古, 24, 1-30.
- 諏訪間順 (1989) ナイフ形石器文化の終焉と尖頭器文化の成立—相模野台地の石器群を中心に—. 旧石器考古学, 38, 93-102.
- 諏訪間順 (1999) 関東地方. 石器文化研究, 7, 21-28.
- 諏訪間順 (2001) 相模野旧石器編年の到達点. 「平成 12 年度神奈川県考古学会考古学講座 相模野旧石器編年の到達点予稿集」: 1-20, 神奈川県考古学会.
- 諏訪間順 (2003a) 相模野旧石器編年の前提. 考古論叢神奈河, 11, 151-159.
- 諏訪間順 (2003b) 南関東地方における立川ローム層基底部の石器群. 「日本旧石器学会第 1 回シンポジウム予稿集 後期旧石器時代のはじまりを探る」: 42-52, 日本旧石器学会.
- 諏訪間順・堤 隆 (1985) 神奈川県大和市深見諏訪山遺跡第 IV 文化層の石器について. 旧石器考古学, 30, 85-108.
- 鈴木遺跡刊行会 (1979) 鈴木遺跡 II, 501p+PL166.
- 鈴木遺跡刊行会 (1980) 鈴木遺跡 III, 347p+PL165.

- 鈴木遺跡刊行会 (1981) 鈴木遺跡 IV, 339p+PL110.
- 鈴木次郎 (1986) ナイフ形石器の終末と槍先形尖頭器石器群の出現—相模野第 IV 期石器群の構造的理解—, 神奈川考古, 22, 79-102.
- 鈴木次郎 (1999) 編年論. 石器文化研究, 7, 161-170.
- 鈴木次郎 (2003) 相模野台地のナイフ形石器文化終末期. 第 9 回石器文化研究交流会発表要旨, 53-57.
- 鈴木次郎 (2007) 「月見野・野川」の画期と日本列島の旧石器時代研究—1960 年代後半～70 年代前半の旧石器時代研究を振り返る—. 明治大学校地内遺跡調査団編「考古学リーダー 11 野川流域の旧石器時代」: 8-21, 六一書房.
- 鈴木次郎・矢島國雄 (1978) 先土器時代の石器群とその編年. 大塚初重・戸沢充則・佐原 眞編「日本考古学を学ぶ (1)」: 144-169, 有斐閣選書.
- 鈴木次郎・矢島國雄 (1979) 相模野台地におけるナイフ形石器文化終末期の様相. 神奈川考古, 7, 1-20.
- 鈴木次郎・矢島國雄 (1988) 先土器時代の石器群とその編年. 大塚初重・戸沢充則・佐原 眞編「日本考古学を学ぶ (1) [新版]」: 154-182, 有斐閣選書.
- 鈴木美保 (2005) 槍先形尖頭器石器群の展開—南関東地方におけるナイフ形石器と槍先形尖頭器—. 石器文化研究, 12, 209-214.
- 鈴木忠司編 (1980) 寺谷遺跡. 417p+PL32, 平安博物館.
- 高井戸東遺跡調査会 (1976) 高井戸東遺跡. 42p.
- 高井戸東 (駐車場西) 遺跡調査会 (1977) 高井戸東 (駐車場西) 遺跡. 61p+PL17.
- 竹岡俊樹 (2002) 図説日本列島旧石器時代史. 546p, 勉誠出版.
- 竹岡俊樹 (2003) 旧石器時代の型式学. 267p, 学生社.
- 竹岡俊樹 (2005) 旧石器時代研究における編年作業の問題点. 明治大学文学部考古学研究室編「地域と文化の考古学 I」: 143-154, 六一書房.
- 滝沢 浩 (1962) 埼玉県市場坂遺跡略報—ナイフ形石器を主体とするインダストリー—. 考古学手帖, 15, 4-7.
- 滝沢 浩 (1965) 関東・中部のナイフ形石器. 歴史教育, 13 (3), 28-33.
- 多聞寺前遺跡調査会 (1983) 多聞寺前遺跡 II. 692p+PL97.
- 田村 隆 (1992) 遠い山・黒い石—武蔵野 II 期石器群の社会生態学的一考察—. 先史考古学論集, 2, 1-46.
- 田村 隆 (2003) 林小原子台再訪—東部関東における長者久保・神子柴石器群—. 安斎正人編「考古学」I, 1-51.
- 田村 隆 (2005) この石はどこからきたか—関東地方東部後期旧石器時代古民族誌の叙述に向けて—. 安斎正人編「考古学」III, 1-72.
- 田村 隆 (2006) 関東地方の地域編年. 安斎正人・佐藤宏之編「旧石器時代の地域編年の研究」: 7-60, 同成社.
- 田村 隆・橋本勝雄 (1984) 房総考古学ライブラリー I 先土器時代. 310p, (財) 千葉県文化財センター.
- 田村 隆・国武貞克・吉野真如 (2003) 下野—北総回廊外縁部の石器石材 (第 1 報)—特に珪質頁岩の分布と産状について—. 千葉県史研究, 11, 153-143 (1-11).
- 田中英司 (1979) 武蔵野台地 IIb 期前半の石器群と砂川期の設定について. 神奈川考古, 7, 65-74.
- 田中英司 (1984) 砂川型式期石器群の研究. 考古学雑誌, 69 (4), 1-33.
- 戸田正勝 (1999) 旧石器. 126p, ニューサイエンス社.
- 東京都教育委員会 (1974) 調布市仙川遺跡. 58p+PL21.
- 遠竹陽一郎・野口 淳 (2009) 2007 年調査の概要: 下原・富士見町遺跡補足調査, 明治大学校地内遺跡調査団年報, 5, 12-28.
- 戸沢充則 (1968) 埼玉県砂川遺跡の石器文化. 考古学集刊, 4 (1), 1-42.
- 戸沢充則 (1980) 日本先土器時代研究の視点. 神奈川考古, 8, 1-10.
- 戸沢充則 (1986) 総論—考古学における地域性—. 近藤義郎・横山浩一・甘粕 健・加藤晋平・佐原眞・田中 琢・戸沢充則編「岩波講座日本考古学 5 文化と地域性」: 1-26, 岩波書店.
- 戸沢充則 (1990) 日本先土器時代文化の構造. 439p, 同朋社.
- 鶴丸俊明 (1983) ブロック—その厚さの意味の検討—. 「多聞寺前遺跡 II」: 611-644, 多聞寺前遺跡調査会.
- Waters, M. R. (1992) Principles of Geoarchaeology: A North American Perspective. 398p, The University of Arizona Press.
- 矢島國雄 (1977) 先土器時代遺跡の構造と遺跡群についての予察. 考古学研究, 23 (4), 101-109.
- 矢島國雄 (2005) 月見野遺跡群の調査と旧石器時代研究—相模考古学研究会と地域研究—. 明治大学文学部考古学研究室編「地域と文化の考古学 I」: 777-790, 六一書房.

- 矢島國雄・鈴木次郎 (1976) 相模野台地における先石器時代研究の現状. 神奈川考古, 1, 1-30.
- 山田 哲 (2000) 炉址周辺における遺物分布の検討—北海道十勝地域の事例を通して—. 月刊考古学ジャーナル, 465, 21-24.
- 山田 哲 (2003) 炉址周辺における遺物分布の検討—北海道地域の事例より—. 「旧石器人たちの活動をさぐる—日本と韓国の旧石器研究から—講演会・シンポジウム予稿集」: 137-148, 大阪市学芸員等共同研究「朝鮮半島総合学術調査団」.
- 山原敏朗 (2008) 更新世末期の北海道と完新世初頭の北海道東部. 佐藤宏之編「縄文化の構造変動」: 35-52, 六一書房.
- 山岡拓也 (2004) 後期旧石器時代における石器素材利用形態の一画期. 考古学研究, 51 (3), 12-31.
- 山岡拓也 (2005) 石器認定研究の課題. 論集忍路子 I, 29-42.
- 山岡拓也 (2008) 武蔵野台地における後期旧石器時代前半期石器群の層位編年的研究に関する諸問題. 比田井民子・伊藤健・西井幸雄編「考古学リーダー14 後期旧石器時代の成立と古環境復元」: 61-71, 六一書房.
- 山岡拓也 (2009) 後期旧石器時代前半期における石器素材利用形態の研究 (東京都立大学提出学位請求論文). 238p.
- 大和市教育委員会 (1979) 上和田城山遺跡. 132p.
- 吉田政行 (1995) 武蔵野台地の V~IV 下層段階石器群について. 石器文化研究, 5, 9-24.
- 吉川耕太郎 (1998) 後期旧石器時代における石器原料の消費過程と遺跡のつながり—南関東地方立川ローム VI 層段階を事例に一. 旧石器考古学, 56, 43-59.
- 吉川耕太郎 (2002) 南関東地方における後期旧石器時代「立川ローム層第 VI 層段階」の様相 (上). 旧石器考古学, 63, 35-50.
- 吉川耕太郎 (2003) 南関東地方における後期旧石器時代「立川ローム層第 VI 層段階」の様相 (下). 旧石器考古学, 64, 43-50.

History and Perspectives of Studies about so-called “Knife Shaped Tool Culture”: From a view point of Chronostratigraphy divided by Terrace Lands in the Southern Kanto plain.

Masaki NAGANUMA

This paper discusses a history and perspectives of chronological studies about so-called “Knife Shaped Tool Culture” (Upper Paleolithic in Japanese Islands; approximately 35,000-17,000CYBP) in Southern Kanto plain. Many of studies are characterized by two particular frameworks. One is chronostratigraphy of multi-component sites situated in thick eolian deposits on the terraces of rivers; the other is division of the systems of chronology between such local terrace lands. These features were resulted from social background related to marked increase in land developments of the Metropolitan area during the period of the time from 1970-80’s. Since then, urgent excavations for destroying archaeological sites have been main part of archaeological social practice, and excavators had been under the necessity of putting a mass of material in order in a relatively short period of the time. Furthermore, the “Localism of chronology”, which also had been caused by accumulation of archaeological records of the Paleolithic investigations, had strongly supported the local separation of chronological systems into terrace lands or administrative districts.

However, using “Cultural Layer” reported inseparably from previous chronological premise as basic dates for archaeological interpretations, and different local systems of chronology are not well suited to explain behavioral variability in the Pleistocene hunter-gatherer activities. Towards the behavioral explanations for Paleolithic records in Kanto plain, we should examine the unit of activity traces more thoroughly taking into account the formation process of each Paleolithic site, and spatial distribution of site groups beyond border lines of terrace lands and districts belong to present-day society.

**Investigation Group for Archaeological site, Meiji University.

Wakamatsu-cho 5-6-1, Fuchu-shi, Tokyo, 183-0005, Japan.

E-mail : mngnm@solid.ocn.ne.jp